

第118回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2019年6月10日(月) 14時～17時

兼題「枇杷」

- 川井素山 ○潮風の傾に枇杷の熟れにけり  
蜘蛛の囀の破れて光る雨上り  
表札の増えし隣家や柿若葉  
摩崖仏欠けし慈顔や花菖蒲
- 保井寶正 ○寺の桶家名うすれし夏書<sup>げがき</sup>かな  
枇杷の種白磁の皿にころり三つ  
降り立てば薫風抜ける名駅舎  
夏休み付箋だらけの花図鑑
- 佐久間喬 ○<sup>みどりご</sup>嬰兒の泣き声透る梅雨晴間  
オペを待つ病室の窓五月闇  
夏来たり樹々の色変へ退院す  
枇杷の実の三つ四つ転げ垣の外
- 丸山酔宵子 ○ストレスをつまみに呑むか走り梅雨  
土用の日串打つ指の逞しき  
水弾き枇杷盛る皿を探しけり  
熟れ枇杷や明日は腸内内視鏡
- 菊地崇之 ○一房の枇杷の<sup>おもて</sup>面に母映る  
紫陽花や映し出でたる楊貴妃像  
花菖蒲<sup>かすり</sup> 緋姿の伊藤蘭  
十薬や栽培せずも庭を占め
- 吉田啓悟 ○房総の誘ふ枇杷狩り即決す  
鰻屋のふるびきつたる店構へ  
身の中は噴火口なり揚羽蝶  
今日の色明日明後日七変化
- 青木英林 ○黒南風や潮騒の音ここまでも  
ぼっかりと浮ぶ色香や合歓の花  
栗の花あちこちに見ゆ常磐道  
献上の枇杷は房州サイズ艶

山本草風 ○茹でたての卵剥く如枇杷食べる  
鍛錬の日焼け止め塗る少女一人  
飯を食い隣で妻も昼寝かな  
風薫り夫婦の諍い穏やかに

渡辺鯨波 ○枇杷たわわ潜伏キリシタンの里  
父の日や万年筆でマス埋める  
走り梅雨ここは終活一休み  
通院をさぼり万緑潜り込む

後藤克彦 ○雨続きいつしか伸びし余り苗  
登校の子足止め見るや時計草  
枇杷の実や届かぬ枝に数多し  
雨上がり見栄え一段濃紫陽花

永井正孝 ○枇杷の実の青大将が護りおり  
竹の子を摺り足をもて探索す  
虹立ちて異郷の空が美しき  
紫陽花を背負ひて墓の現わるる

佐久間たか子 ○初枇杷の雨音になほ匂ふかな  
赤子来る雷雨に消さる泣き声よ  
新茶飲む窓辺のくもは絵画かな  
蛍火や同時点滅いさぎよき

原 唱如 ○母になる娘は母にカーネーション  
流言の小さく大きく枇杷に種  
石膏の天使の足裏青葉風  
老人にハツドク匂ふ町溽暑

青葉ひかる ○枇杷の木を移し行く末安堵か  
因果かな為す術も無し夏の夕  
紫陽花に皮肉の大意知る涙  
牡丹色の着物懐かし若き母

次回「萩句会」

日時 2019年7月8日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『山開き』一句  
当季雑詠 三句